

網代笠

この笠は、月性師が諸国を行脚した時使用されたもので、笠の表裏には、篠崎小竹や田能村直人などの詩・書・画の寄書きが見えます。それを納める木箱には、清狂草堂門下生であった天地哲雄の識語が次のように記されています。

一戴圓篁帶異芳況看書画
清狂関西閩東凌風雨山陽
山陰衝雪霜涉水跋嶺天地
廣踰山踰海宇宙荒自差
遺賜過榮重駕下翻將汚靈光

右三十年前謝先師之叔父夢窓翁

之作今茲當先師卅三回之忌辰

營築草堂及宝庫以保存遺物

奉還此笠以充庫藏之一因

重録焉

舊門生

明治卅三庚寅記 備後山南樵隱天地哲雄揮

六月二十日



『維新の先覚月性の研究』 月性顕彰会 マツノ書店

昭和五十四年五月一日 三二七〜三二八頁

いわゆる使僧とは大いに異なるを以て行色打袍中、六字尊号一幅を収む。藩の先君邦憲公(毛利斉元) 手書并に袈裟直衲各一領と、別に筆硯及び友嶋地図をもたらす。梅田(雲浜) 恵むところ、吉田猛士(松陰) のくれし単衣を衣し、浪華名妓阿清施すところの袍破れたるを表に被り、頭刺らざるは三十五日、竹笠をいただき、(上に清狂二大文字を題し、并に崑崙、妓画、皆土井幾之助筆に係る)、鍬杖を携え(宮本彦助恵むところのもの)、布脚絆を穿きて出行す。自ら顧みこの形状を以て堂々大藩に赴き、国家の大事を議し以て王畿の守りを固めんとす、狂亦甚だしき哉。

(原典『南紀行日記』月性顕彰会蔵―引用者注)

『勤皇僧』 知切光蔵 芳文堂

昭和十八年七月三十日発行 二二五〜二二七頁

それからあの笠。月性秘蔵のあの笠こそは、品物に執着のない黙蘇までもが、昨秋九州遊歴の留別に際して、懇望してやまなかつたと伝ふし、秋元晩香などは、此の四五年来ねだり續けで、あの古ぼけた笠一蓋の爲には、酒蔵の二棟ぐらゐ傾むけても構はぬ決心をしてゐると聞かされては驚かざるを得なかつた。さればこそ、大奥様もあの様に大切にせられたのだらう。

それは月性の、半生の遍歴と、交遊の歴史を、そのまま物語る

生前、月性師が天地哲雄師に贈り大切に保管されていたのですが、明治二十三年遺品展示館(現在の清狂草堂)を建設するにあたり、師の遺品が少ないことから妙円寺に寄付をされたものです。



2008. 4. 1(財)月性顕彰会

ものだった。雨露にさらされてばかり、それが黒ずんで見えたのではなかつた。笠には表側と云はず、内側と云はず、殆ど隈もないほどにいろ／＼な寄せ書が施してあるのだつた……。

思へばあの笠を求めたのも、早五六年の昔になる。大阪島町の長光寺が、叔父龍護上人の寺だつた、大和・山城・和泉と、宗學に、儒學に、作詩に修業を重ねて、いよ／＼いよ諸國遍歴の旅にと思ひ立つて、滞在中の叔父の許を出立する時、もとめた眞新しい笠に、叔父が先づ『如風』と認めて呉れたのだつた。それを見た叔父の親友の超然上人が『如雲』と次いで呉れたまでは、血氣の青年僧は、未だ此の笠にさほど重きを置いてはゐなかつた……。

それが、伊勢に齋藤拙堂を訪づれ、ば拙堂が、大阪の篠崎小竹が、廣島の坂井虎山が、更に九州佐賀の草場佩川が、豊後の廣瀬淡窓兄弟が、そして更に再び阪方へ舞ひ戻つた折、月性の爲にわざわざ、在阪の志士文人墨客が開いて呉れた詩筵の席上で、各々が筆を揮つてのよせがきでは、山陽の女弟子で才色兼備を謳はれた、江馬細香女史を初めとして、梁川星巖、紅蘭老夫婦から、野田笛甫、藤澤東咳、森春溝、志士側の、池内大學、頼三樹、梅田雲濱と云つた錚々たる顔觸れが、ズラリと筆を連ねるし、長州萩の、嚶鳴文社の面々も、周布政之助を始めとして、來原良藏、桂小五郎、口羽徳祐達も、いつかの集まりで筆を染めた、宛然、時の天下の名士の顔を一堂に集めた如き貴重な寶物であつたのである。